

ハイランド&アイランド大学の実践 “テクノロジーで学ぶ”大学

瀬田 智恵子*

メディア教育開発センター研究開発部

Some Experiences in The University of Highlands & Islands -A College Consortium of “Learning with Technology”

Chieko Seta**

Research & Development Division, The National Institute of Multimedia Education

Abstract The area of the Highlands and Islands of Scotland covers one fifth of the UK, stretching from the north to the southwest over a distance of 800 kilometers, which is almost as large as the country of Belgium. There were no universities at all except 13 Further Education (FE) Colleges. Under the Government’s “Knowledge Economy” policy, the 13 FE colleges with different histories and characters, formed a consortium to make a University in 1998, and the University of Highlands and Islands Millennium Institute has been approved as a Higher Education Institution since December 2000. “To establish for the Highlands and Islands of Scotland a collegiate university which will reach the highest standards and play a pivotal role in our educational, economic, social and cultural development” is the Mission Statement written multilingually in English, Gaelic, Shetlandic, Scots, and Orcadian. In the meantime UHI degree courses will be validated by the Open University Validation Services, until UHI officially receives a University Status. The University has 5 faculties, offering 29 undergraduate and/or postgraduate courses, and PhD degrees through research. “Learning with Technology” most characterizes UHI, which help remove the traditional barriers of distance and traveling time, and minimizes geographical disadvantage. The students study using e-mail, the Internet, video-conferencing and the telephone at home, at their college and/or regions learning centers. Along with the policies of bridging the gap, personal and professional capabilities (PPCs), flexible ways to study, and equal opportunities, “Learning with Technology” contributes to maximizing the participation of Highlanders in higher education. In this paper, the author first reports the management and development of UHI courses, the study support for the students, case studies of learning online and via video-conferencing, and staff development, and later discusses the significance of UHI, and the issues of “Learning with Technology”, from the viewpoint of what will happen with a forced consortium of colleges of different backgrounds and interests, and what the problems of using such technology regardless of users’ preferences are.

(Received on February 15, 2002)

*) 連絡先 : 261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉2丁目12番 メディア教育開発センター

**) Correspondence: National Institute of Multimedia Education, Chiba 261-0014, JAPAN

はじめに

「スコットランドの高地地方 (the Highland and Islands) のためにカレッジ連合体の大学 (a collegiate university) を設立し、その大学が最高水準にまで到達することによって、スコットランド高地の教育的、経済的、社会的及び文化的な発展の中核的機能を果たせるようにすること。」これは、スコットランドの「ハイランド&アイランド大学」のミッション・ステートメントである。このステートメントは、英語のほかにゲール語 (Gaelic)、シェットランド語 (Shetlandic)、スコットランド語 (Scots)、オークニー語 (Orkadian) で同じことが併記されている。

「クライド・バーチャル・ユニバーシティ (Clyde Virtual University) のプロジェクトは、もう終了しました。“バーチャル・ユニバーシティ”の関連で言えば、The University of the Highlands and Islands (UHI) にいま力を入れています。これは、小さいコミュニティの人々にも高等教育の機会を提供するための取り組みです。ビデオ・カンファレンスなどを介した遠隔教育で、学生は多様な科目にアクセスできるようにします。近く高等教育機関として正式に認可されます。」これは、2000年2月に「バーチャル・ユニバーシティ」の調査を目的にスコットランド高等教育助成委員会 (SHEFC) を訪問した際に、Quality and Learning Innovation (品質と学習の改革部門) の副部長が話してくれたことである。これが、筆者とUHIの出会いである。

「ハイランド&アイランド大学」とは、どういう大学なのか？一言で言えば、「スコットランド高地に点在する、地場産業に密着した既存の13の職業専門カレッジを、学部ないしは分校と見立てて一つの大学体を形成する。そして、従来は自己完結的にそれぞれのカレッジでface-to-faceを主流に行ってきた授業を、ITの活用により他校の学生も履修可能にすることで、大学卒業資格取得に必要な履修単位を取得出来るようにする。」というものである。

折からわが国においても、「大学連合体」「授業交流与単位互換」「授業改善に資するメディアの活用」「遠隔手段による取得可能単位の拡大」「バーチャル・ユニバーシティ構想」など、「高等教育におけるIT活用」と関連する話題が関係者の間で身近なものとなっていた。UHIの実践は、「沿革、目的、規模、熱意等を異にする学校で形成する大学連合体の運営方法」「当

事者の意志とは無関係に必須とせざるを得ない条件下でのIT活用のためのFDの課題」「異なる学校間の教員、学生のレベルを一定水準に保つための方策」を考える上での好事例として、わが国にも参考になることが多々あると思われた。

そこで2000年2月の調査を土台に、以来、ウェブページ < <http://www.uhi.ac.uk> > からの情報収集と整理 平成13年度日本学術振興会特定国派遣研究者 (イギリスB) による訪問調査、等により継続調査を行った。

における訪問機関は、スコットランド高等教育助成委員会 (SHEFC)、UHI本部 (Inverness Executive Office)、パース・カレッジ (Perth College)、インバネス・カレッジ (Inverness College)、ルイス・キャッスル・カレッジ (Lews Castle College)、ノース・ハイランド・カレッジ (North Highland College) である。これらの機関で、関係者からのヒアリング、施設見学、授業参観、教員・学生へのインタビュー、文献収集等を行った。訪問調査にあたっては、次の点に着目した。

- 提供しているコースと学位の特徴
- 教授・学習の方法(デリバリー)
- 教員と学生のメディア・リテラシー
- スタッフ・ディベロプメント
- メディア活用の効果と課題
- コンソーシアムの効果と課題

以下は、調査結果を上述の3つの関心事に照らして整理したものである。

1. ハイランド&アイランド大学 (UHI) の特徴

1.1 地域の特徴

スコットランド高地、「ハイランド」と呼ばれる地方は、イギリス全体の5分の1、ほぼベルギーと同じ面積である。11の島嶼を抱え、ハイランドの南西端からシェットランド島北端までは500マイルの距離がある。砂浜、岩礁の岬、森林、農牧地、湖沼、山、荒野など変化に富んだ景観はヨーロッパでもユニークなものとしてされている。英国全土の半分以上を占める海岸線は世界で最も変化に富んだ生態系をもたらす地域の一つとされている。人口50万人、人々は小作農場・牧場、漁業、農業、林業、観光などで生計を立てている。近年は、ハイテクの恩恵にも多少あざかつ

ている。文化は多様性に富み、5つの地方言語のほか、地域特有の習慣や伝統がある。これは、冒頭に引用した5種類の言語によるUHIのミッション・ステートメントにも如実に示されている。(図1を参照)

農業、漁業、織物業、ニットینگ等、伝統産業関連のコースを持つ職業専門カレッジ(Further Education College:FE)は13校点在しているが、UHIの創設を見るまで大学(University)は1校も無かった。「ハイランド地方に大学の設置を」という希望は1658年当時からSir Thomas Urquhartにより「Highland University構想」として提唱されていたが実現しないまま3世紀半が経過した。近年の高学歴志向の中で若者はグラスゴー、エディンバラ、アバディーン、スターリング等の大学に進学し、卒業後も都市部で職を得て故郷には戻らない。ハイランド地方に若者を

定着させ地域を活性化させる上でも、土地を離れて高等教育を受けることが不可能な人々の学習ニーズに対応する上でも大学の設置が喫緊の課題となった。しかし、個々のFEカレッジが大学に昇格出来るほどの人的・物的資源を整備するのはコスト面で無理がある。また、FEカレッジ自体は現在も重要な職業専門教育機関として機能しており、コースを廃止することは不可能である。

1.2 沿革

このような状況への対処の方法として、スコットランド高地と島嶼の僻地に点在する13校のFEカレッジと研究機関でコンソーシアムを形成し、学位授与サービス機関との協定で学位を授与できる「ハイランド&アイランド大学」(University of the Highlands and Islands : UHI)が1998年に創設された。1997年の「ディアリング報告」、及び「ディアリング報告」のス

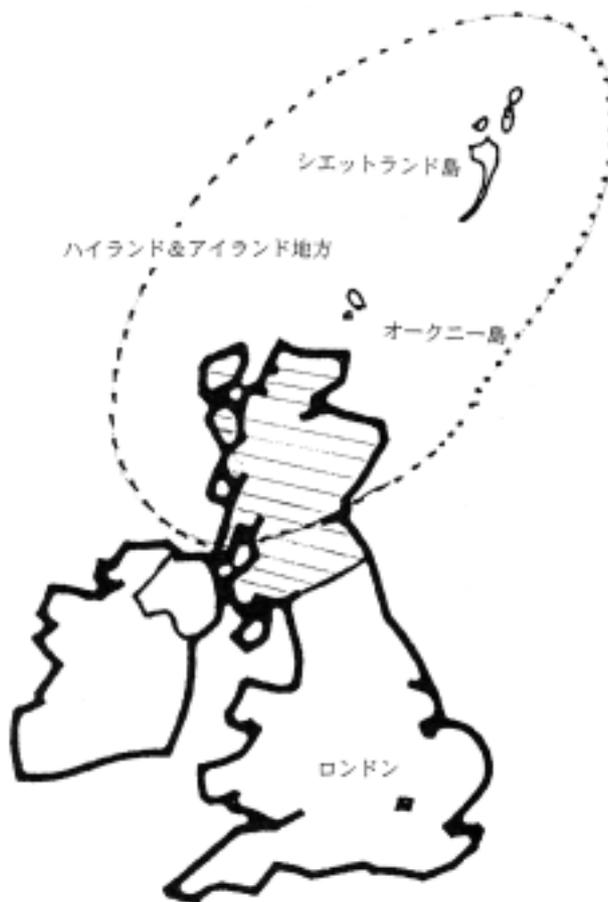


図1 スコットランド

コットランド版である「ガリック報告」で強調している「知識経済(Knowledge Economy)」も追い風になったという。

1996年に産業界、公共団体、カレッジと研究所グループがThe Millennium Commissionに大学設置を提言した結果3,335万ポンドを得て、1998年にUHIが誕生した。UHIは試行段階を経て、2000年12月に「高等教育機関」(Higher Education Institution)に認定されスコットランド高等教育助成委員会の助成対象機関となったが、「大学」(University)としての地位は未だ認められていない。オープン・ユニバーシティ(OU)またはスコットランド資格認定機関(SQA)から学位は授与される。次の課題は、「大学」としての地位を得ることである。

2001年4月から正式には、The University of the Highlands and Islands Millennium Instituteという名称になった。なお、イギリスでは、Universityは自身で学位授与機能を持つがCollegeにはその機能がない。それを明確に表すために、本稿では、Universityは、「大学」Collegeは「カレッジ」と訳している。

1.3 「テクノロジーで学ぶ」大学

UHIの最大の特徴は、「テクノロジーで学ぶ」(Learning with Technology)をコンセプトにITを最大限に活用していることである。シームレスで高速データ通信が可能なUHI Wide Area Network(WAN)を設けている。UHIの学生は、e-mail、インターネット、ビデオ・カンファレンス・システム、電話、地域学習センターの活用等により、通学のために居住地や職業を変えることなく履修が可能である。「You should not move to learn」を標榜している。数年以内に、UHIの放送サービス(デジタル・テレビとラジオ)と無料テレホン・サービスを開始の予定であるという。

UHIでは、「遠隔と交通時間がもたらす伝統的阻害要因」を克服するために、学生、講師、メンバー・カレッジ、学習リソース・センターの利用に供する超高速エレクトロニック・ネットワークの構築に2,200万ポンドを費やした。

教授・学習活動はITに依存している大学ではあるが、関係者は「UHIはNetworked UniversityであってVirtual Universityではない。実在する土地に校舎が実在し人間がいる。」ことを強調している。「UHIは、Distributed Learning(分散型協調学習)であって、決してVirtual(バーチャル)ではない」というのは、UHI本部の幹部のコメントである。

1.4 学校間のギャップをつなぐ架け橋

UHIは、職業専門教育と高等教育との間に横たわるギャップをつなぐことも目的としているので、UHIの職業専門教育コースの中に進学ルートを展開している。具体的には、上級国家サーティフィケート(HNC)か高等教育サーティフィケート(CertHE)を目指して学習を開始し、次に高等教育ディプロマ(DipHE)を取得して学士号へと進み、大学院の学位取得も可能にするという進路である。この方法なら、ある時点で学業を一時中止して、それまでに取得した資格を職業生活に活用することも出来る。あるいは一方では、直線型のUHIモジュールとして履修して最終学位のための単位として利用することも出来る。

1.5 個人及び専門職業能力開発(PPCs)

学生が職業生活の準備をし、社会への貢献を果たせるようにするためにUHIが講じている方策の一つが、学習モジュールの中に「個人及び専門職業能力開発(Personal and Professional Capabilities: PPCs)」の統合するという方法である。学部課程カリキュラムのすべてのレベルで、すべての科目にPPCsを取り込んでいる。PPCsによって個人の潜在能力を伸ばし、将来の職業生活において、「自己の管理と開発」「批判的で創造的な思考」「プレゼンテーション」「他人との協調」「価値の処理」という5つの主要領域に役立つようにすることに留意している。

1.6 フレキシブルな学習

UHIでは、学生が「どのように」「いつ」「何を」「どこで」学ぶかの選択肢をできるだけ多くすることで、生活の中に学習が無理なく適合するように配慮している。最も妥当なレベルから学習を開始し、さまざまな段階を得ながら上級へと進んで行けるようにコースを設計している。

それらの中には、単位蓄積・互換制度(Scottish Credit Accumulation Transfer Scheme: SCOTCATS)、モジュール選択、フルタイム制と並行したパートタイム制、既習歴の単位化(Accreditation of Prior Learning: APL)、実習歴読み替え認定(APEL)、アクセス・プログラム(学習スキル、自己開発、基礎学習など)がある。かなりの部分が成人学生のための学習機会を念頭においたものであり、子育て中の女性の学習を保障するためにキャンパス内または学校の近辺に保育施設も設置している。

1.7 機会均等

UHI では機会均等の理念により、すべての面における機会の保障の推進に留意している。特に、コミュニティでの学習、雇用、参加においてジェンダー、性別、年齢、障害、宗教、及び社会経済的背景、性的志向、あるいは人種に基づいた差別を払拭することに努めている。

2. メンバー・カレッジと学部

2.1 メンバー・カレッジ

UHI を構成する 13 のカレッジは、Argyll College (1999 年創立。以下数字は創立年)、Highlands Theological College(1994)、Inverness College(UHI の中では最大規模の 1 つ)、Lews Castle College(1953)、Moray College(UHI の中では最大規模の 1 つ)、North Atlantic Fisheries College(1992)、North Highland College、Orkney College(UHI の中では小規模カレッジの 1 つ)、Perth College, Subhal Mor Ostaig(1973。ゲール語使用のカレッジ)、Scottish Association for Marine Science, Seafish Aquaculture, Shetland College、である。他に、Lochaber College と Highland Psychiatric Research Foundation が協力機関となっている。

また、各カレッジはチュートリアルや学生の自学自習のために、専用の建物か、あるいはコミュニティ・センターや時には学校と契約してそれぞれいくつかの地域学習センターを持っている。(図 2 を参照)

2.2 学部とコースの種類

学部は、「美術・文化・遺産学部」(Faculty of Arts, Culture and Heritage)、「ビジネス・余暇学部」(Faculty of Business and Leisure Studies)、「環境・自然システム科学部」(Faculty of Environmental and Natural Systems Science)、「健康・社会学部」(Faculty of Health and Social Studies)、「情報・工学システム学部」(Faculty of Information and Engineering Systems) の 5 学部である。

以下の 2.3 ~ 2.7 のリストは、2002 年度用大学要覧の記述を基に、学部名と学部長所属カレッジ、コース名と取得学位、リードカレッジ、コース提供カレッジの一覧化を試みたものである。

ここで興味深いのは、学部長が所属しているカレッジが、リードカレッジはおろか、コース提供カレッジに入っていない例も珍しくないことである。全 29 コース中、学部長所属カレッジがリードカレ

ジになっている例は 5 例、コース提供カレッジに入っている例は 13 例に過ぎない。つまり、学部長所属カレッジでありながら、その学部に属するコースを全く提供しないカレッジが 55% に上ることになる。スコットランド高等教育助成委員会の関係者によると、UHI においては、学部長は通常の大学以上に経営管理的な役割を期待されているので、コース提供カレッジになるか否かは重要な問題ではないという。コースの内容に関する責任はコース・リーダーにある。

図 3 は、「環境・自然システム科学部」と「健康・社会学部」を事例に、学部長所属カレッジ、リード・カレッジ、コース提供カレッジの関係を図式化してみたものである。(図 3 を参照)

2.3 美術・文化・遺産学部

学部長カレッジ：Lochaber College

Gaelic Language and Culture/Gaelic with North Atlantic Studies コース(BA)

(1) リード・カレッジ：Subhal Mor Ostaig (2) コース提供カレッジ：Inverness, Lews Castle, Subhal Mor Ostaig (以下のリストにおいても i はリード・カレッジ、ii はコース提供カレッジを示している。末尾に * 印を付したコースは、提供カレッジ以外からも履修可能。)

Cultural Studies コース(BA)

(1) Orkney College (2) Inverness, North Highland, Orkney, Shetland

Archaeological Practice コース(MA, PgDip, PgCert)

(1) Orkney (2) Orkney

Music Performance コース(BA)

(1) Perth College (2) Perth, North Highland

Fine Art コース(BA)

(1) Moray College (2) Inverness, Moray

Contemporary Textile Design and Related Craft コース(DipHE)

(1) Shetland College (2) Orkney, Shetland

Theological Studies コース(BA)

(1) Highland Theological College (2) Highland Theological College

2.4 ビジネス・余暇学部 (Faculty of Business and Leisure Studies)

学部長所属カレッジ：Moray College

Tourism コース(BA) *

(1) Perth College ii Inverness, North Highland, Orkney,

UHI Millennium Institute

The map below shows the locations of UHI's Academic Partners and their learning centres. More information on each Academic Partner can be found by turning to pages 89 - 96 in this prospectus, or by contacting the Partner direct.

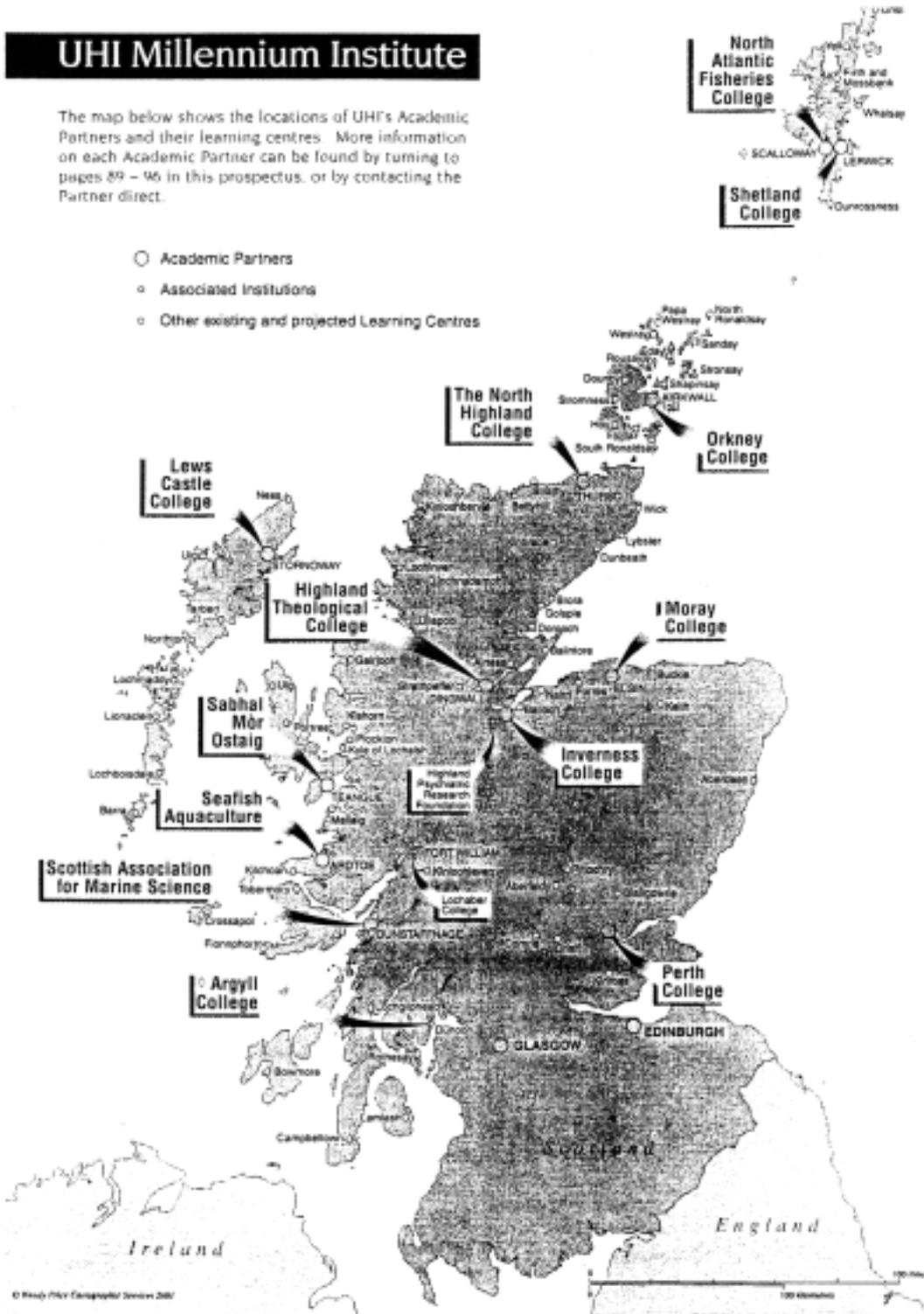
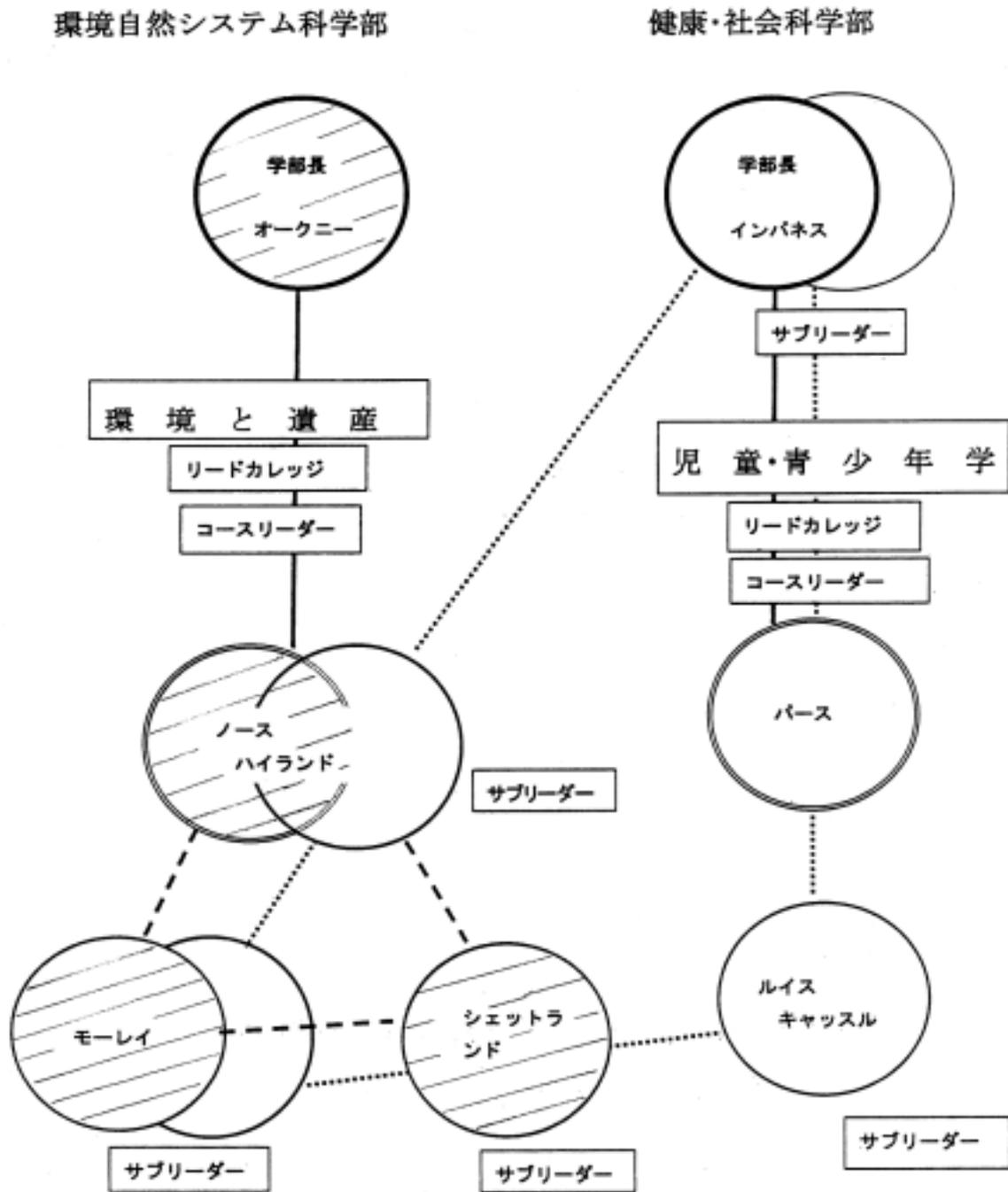


図2 ハイランド&アイランド大学を構成するカレッジ分布図



UHIのコース運営図

図3 ハイランド&アイランド大学のコース運営

Lochaber, Perth

Business Administration コース(BA) *

(1) Inverness College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, North Highland, Orkney, Perth, Shetland

Business Information Management コース(BSc) *

(1) Moray College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, Orkney, Shetland

Golf Management コース(BA)

(1) North Highland College (2) North Highland

Management コース(CertHE, DipHE)

(1) Perth College (2) Inverness, Lews Castle, Lochaber, Moray, North Highland, Orkney, Perth

Outdoor Adventure Management コース(BA)

(1) Inverness College (2) Inverness, Moray, Perth

2.5 環境・自然システム科学部(Faculty of Environmental and Natural Systems Science)

学部長所属カレッジ : Orkney College

Marine Science コース(BSc) *

(1) The Scottish Association of Marine Science

(2) The Scottish Association of Marine Science

Sustainable Development & Environmental Management コース(BSc) *

(1) Orkney College (2) Orkney

Mariculture Science and Technology/Fisheries Science and Technology/Seafood Science and Technology コース (MSc/PgDip).

Applied Fisheries コース(PgCert)

(1) North Atlantic Fisheries College (2) North Atlantic Fisheries

Applied Environmental Science コース(BSc)

(1) Inverness College (2) Inverness

Environment and Heritage Studies コース(BSc)

(1) North Highland College (2) Moray, North Highland, Shetland

Forestry and Conservation コース(BSc)

(1) Inverness College (2) Inverness

2.6 健康・社会学部 (Faculty of Health and Social Studies)

学部長所属カレッジ : Inverness College

Child and Youth Studies コース(BA)

(1) Perth College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, North Highland, Perth

Social Science コース(BA)

(1) Inverness College (2) Inverness, Moray, Perth

Rural Health Studies コース(BSc)

(1) Lews Castle College (2) Lews Castle, Perth

Rural Development Studies コース(BA) *

(1) Lews Castle College (2) Lews Castle, Moray

Professional Development コース(MA)

(1) Lews Castle College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, North Highland, Orkney, Perth, Sabhal Mor Ostaig, Shetland

Infection Control コース(MSc)

(1) Inverness College (2) Inverness

2.7 情報・工学システム学部(Faculty of Information and Engineering Systems)

学部長所属カレッジ : Inverness College

Computing コース(BSc)

(1) Lews Castle College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, Orkney, Perth, Shetland

Mechanical Engineering コース(BSc)

(1) North Highland College (2) Inverness, Lews Castle, Moray, North Highland, Perth

Aircraft Maintenance Engineering コース(BSc)

(1) Perth College (2) Inverness, Moray, North Highland, Perth

Electrical Engineering コース(BSc)

(1) Inverness College (2) Inverness, Moray, North Highland, Perth, Shetland

なお, 将来は他に Design and Construction コース (BSc) を開設する予定。

3. コースのレベル, 及びコース開発と運営

3.1 コースのレベル

UHIが提供するコースは, レベル1の高等教育サーティフィケートから始まり PhD の8段階までである。

レベル1 (120単位): (Certificate of Higher Education (CertHE), or Higher National Certificate(HNC) (高等教育サーティフィケートまたは上級国家サーティフィケート)

レベル2 (240単位): Diploma of Higher Education (DipHE), or Higher National Diploma(HND) (高等教育ディプロマまたは上級国家ディプロマ)

レベル3 (360単位): Ordinary Degree(BSc, BA) (通常の理学士または文学士)

レベル4 (480単位): Honours Degree (優等学位)

主要領域科目について現在 Honours Degree を開発中である。

レベル 5 ~ 7 : Postgraduate Degrees (MSc, MA) (理学修士課または文学修士)

UHI の課程コースとしては最終レベルであり、志願者は Undergraduate Degree を取得していることが条件。中退者には, PgCert, PgDip (大学院サーティフィケートまたは大学院ディプロマ) を授与する。

レベル 8 : Postgraduate Degrees by Research (PhD., Mphil) (研究による学術博士または学術修士)

UHI が授与できる最高のレベルの学位。PhD は最低 3 年間の独立した研究プログラムでのみ取得可能である。

UHI では、独立した研究の推進を目的に、4 領域の研究大学院、つまり自然システム科学大学院 (School of Natural Systems Sciences)、言語・文化・遺産大学院 (School of Language, Culture, and Heritage)、持続可能な地域開発大学院 (School of Sustainable Rural Development)、学習環境とテクノロジー大学院 (School of Learning Environments and Technology) を設けている。学位は、オープン・ユニバーシティ学位授与サービス (OUVS) により授与される。

3.2 コースの開発と運営

UHI の 29 コースは、学部長所属カレッジとは殆ど無関係に開設されているのは、すでに述べた通りである。では、誰がどのようにしてコース開発をするのか？

コース開発に当たっては、「これこれのコースが必要」と思った教員がメンバー・カレッジに打診する。関心がある教員が手を挙げる。手を挙げるのは当然自分のカレッジでも開講したいと考える人である。呼びかけた教員をコース・リーダーに、手を上げた教員がサブ・リーダーとなり、コース・チームを編成する。上記の 2.2 で掲げた「リード・カレッジ」とは、コース・リーダーのいるカレッジであり、コース提供カレッジとはリーダーも含めコースチーム・メンバーがいるカレッジである。各カレッジでの授業はこのメンバーが責任を持つ。

コースの運営責任はコース・リーダーにある。また、コース・リーダーは、サブ・リーダーをマネージしてコースの進捗とレベルの歩調を合わせる責任も負っている。そのために、サブ・リーダーと定期的にコース運営や教授・学習活動の課題に関する連絡会をビデオ・カンファレンスを介して開催する。

また、コース・リーダーは、新学期開講 1 週間後を目途に、コース提供カレッジ全てを個別に訪問し、受講生と顔合わせをし、コース履修上の問題点、疑問等に関して直接意見交換をする。これは、オンラインやビデオ・カンファレンスなど遠隔での間接的な接触を余儀なくされるシステムの下で、「親近感を高めるためのヒューマン・コンタクト」を確保するためである。「コミュニケーションを密にすること」を目的とするこのセッションに参加する学生の旅費は、カレッジが負担する。

自分が所属するカレッジでは提供していないコースを履修希望する学生に対しては、コースによっては、オンラインあるいはビデオ・カンファレンス等を介しての受講は可能である。(2.3 ~ 2.7 を参照)

4. 学習支援

UHI の各コースは、15 単位毎のモジュール 1 単位につき 10 時間の学習を目安で編成されている。すでに述べたように、スコットランド単位蓄積・互換制度 (SCOTCATS) の適用、既習暦の単位化 (APL)、実習歴読み替え認定 (APEL) の制度による既習暦の評価を導入、既習暦の無い人を対象とする Access Programme の用意、をしている。現在、学生の 70% が 25 歳以上の人である。

学習支援の主な方法は、「Black Board の活用」「学習リソースセンター」「個人面接授業によるフォロー」である。

4.1 Black Board の活用

UHI では、オン・キャンパスの大学の学生なら学内掲示板によって連絡するような事務的事項、また学生と教員との連絡、教員 学生間や学生 学生間の教授・学習上のディスカッション、授業や宿題のアナウンス等をすべて「Black Board」の活用によって進めている。

4.2 学習リソースセンター

各カレッジには、学習リソースセンターが設置しており、ここではコンピュータ・スキルの自学自習、課題の学習、任意の学習等に供するために、かなりの台数のコンピュータが設置してある。数学、IT、コミュニケーション等、基礎的な科目に関する補完授業も行っている。この他、外部に独立した地域学習センターを設置する、あるいはコミュニティ・センターや学校を学習リソース・センターとして契約するなど、

カレッジから遠隔の地域に居住する学生の不利益を解消する方策も講じている。

4.3 個人面接授業によるフォロー

ビデオ・カンファレンスによるセミナー、インターネットを介したオンライン・ディスカッション等は、学生が物理的距離に関係なく学習に参加するのを可能にしている。しかし、地域的条件、学習形態、学習プログラムの違いにより何らかの不均衡は生じる。それを考慮して、face-to-faceあるいはビデオ・カンファレンスを介した個人面接授業により、学習上の問題点を克服するのを支援・指導する人材が常に学生の手の届くところに居るように配慮している。

5. 事例1 オンラインコース

現在、学士課程のChild and Youth Studiesと修士課程のInfection ControlはWebCTを使った全面オンライン・コースである。

5.1 MSc in Infection Control

このコースの対象者は、看護婦、相談員、公衆衛生専門官、環境衛生専門官等、感染症コントロールの分野に従事する専門職である。

2001年の履修生は18名。10名と8名に分けて各々1人のチューターがついている。チューターはコンテンツに関するサポートをし、他にメンターがいて修士課程レベルの学習スキルなどの学習支援をする。1年に一度、新学期にウィークエンド・スクーリングを行う。日程は、金曜日午後7時に集合し、日曜日午後1時に解散する。18名中14名が、授業料は保健行政の負担に寄る人である。

フルタイム・コースは4モジュールで成り立っており、1モジュール当たり、15週、150時間を基準にしている。

学士課程の「Child and Youth Studies」は、コースチームメンバーを中心とするUHIの内部開発であるが、修士課程「Infection Control」は開発方法が異なっている。UHI内部にはこの分野の専門家が少ないために、エディンバラ大学、アバディーン大学等からの協力を得て、コースを開発した。コンテンツを執筆するのは教員、それをウェブ化するのは外部の専門家の手に委ねた。理由は、執筆者の本務校が互いに遠隔地であるのでウェブ化するために一堂に集まり協議するのが困難であったこと、及び大学院レベルのコースのコンテンツを充実するためには、テクニカ

ルなことに時間を割くことには無理があるとの判断による。

5.2 BA in Child and Youth Studies

このコースの履修者は、有職成人、あるいは現在は子育て中の女性で、小学校の教員志望者が多い。

2001年9月開始の学期の履修者は75 - 80名で、インバネス・カレッジの履修者は27名である。

パートタイム・コースの学生が多いので、学生に貸与するコンピュータの購入費や学生がコンピュータを購入するための助成金を行政から得られない。

2001年9月18日新学期の「コース・リーダーとの顔合わせ」に集合したInverness Collegeの学生にオンライン・コースの選択理由、問題点等に関するインタビューを試みた。

* 自宅は、カレッジから25マイル離れており、バスは不便な上、冬期は道路の状態が悪くて通学出来ない。オンラインなら冬期でも学習が可能である。オンラインでの学習は初めてである。ビデオ・カンファレンスの経験はない。(女性)

* オンラインでフレキシブルに学べるのが、仕事を持っている自分にはフィットする。(男性)

* 子育て中に学習するには、オンラインは便利。(女性)

* オンラインの方が学習しやすい。それは、face-to-faceの授業では、聞き落とししたり、欠席すると分からなくなってしまうが、オンラインなら分かるまで何度も復習できる。face-to-faceも必要だが、毎回先生と顔を合わせる必要はない。(女性)

* 問題点は、家のコンピュータからのアクセスは早いですが、カレッジでのアクセスは極端に遅い。時間が惜しいと思う。(男性)

上記が、学生からの共通した声である。筆者もInverness Collegeで、このコースのデモンストレーションをしてもらった機会を得た。学士課程のChild and Youth Studiesと修士課程のInfection Controlで構成されているウェブ教材は、同カレッジに設置のコンピュータでは立ち上がりが非常に遅く、1課題のコース教材を開くのに30分を要した。

コンピュータのアクセスについては、この2日後に訪問したLews Castle Collegeでは、全く逆の状況であった。このカレッジは、「学習環境・テクノロジー部門」担当カレッジであり、高性能のIT機器を整備している。ここでは、大学からのアクセスには全く問題が無いが、学生の自宅からのアクセスは非常に遅

いという声がある。UHI の利用には高速ネットワークが設けられているが、個別のパソコンの性能によって効果には落差がある。

更に、2001年9月19日には、スコットランドは大規模なコンピュータ・ウィルスの攻撃を受けた。ウィルスが自己増殖をしていきコンピュータがクラッシュするので、機能をストップさせたという。そのため、ウェブ上のコースウェア、Black Board はもちろん、e-mail さえ使えず、学生の住所や電話番号等もコンピュータ管理のため入手不可能となり、遠隔地にいる学生とのコンタクトを2日間取ることが出来なくなった。これは、新学期早々の学生には不安が大きく、また学校側も進度の日程、評定の日程の変更を含め、全面的な影響を受ける結果となった。

6. 事例2 - ビデオ・カンファレンス活用のコース

「You should not move to learn (勉学のために移動する必要がない)」を謳っている UHI ではビデオ・カンファレンスは学習の主要な手段の一つである。2001年1月から、UHI ビデオ・カンファレンシング・サービスはシェットランド・カレッジ (Shetland College) が担当し、スケジュール管理も行っている。ビデオ・カンファレンス・システムの構築に当たっては、1990年あたりから既に高等教育における利用を本格化していたアルスター大学(北アイルランド)が協力したという。

現在、ビデオ・カンファレンスによるコースは、「環境と遺産 (Environment and Heritage Studies)」(BSc)、「経営学 (Business Administration)」(BA)などがあり、他にもチュートリアルや教員間の打ち合わせ等にフルに活用されている。毎月平均300回、1日に10回、1ヶ月あたり1,000時間の利用がある。特に、島嶼部にあるカレッジでの利用頻度は高く「予約は満杯」という。

2001年9月24-25日、ノース・ハイランド・カレッジで、BSc in Environment and Heritage Studies の授業傍聴と担当教員と学生へのインタビューの機会を得た。

6.1 BSc in Environment and Heritage Studies

このコースは、考古学の知識を環境問題、地域開発や観光資源開発の理解に応用することを目的としている。コース・リーダーは考古学者でノース・ハイラ

ンド・カレッジに所属している。このカレッジの学生5名は講師と face-to-face で、サブ・リーダーのいる Morey College からの7名はビデオ・カンファレンス (VC) を介した参加である。授業では、7世紀の城砦や彫刻の特徴をテーマとしていた。講師は、学生に質問を投げかけ、両サイトでの双方向ディスカッションに配慮していることが見て取れた。

授業終了後、両サイトの学生に「どちらかを選択できるとしたら、オンライン・コースとビデオ・カンファレンスのどちらがいいか」等のインタビューを試みた。

学生からは、カメラ、照明の問題、VC教室のサイズの問題等が指摘されたが、「オンライン・コースよりも好き」な点として「講師の顔が見える」「共に学習している他サイトの仲間の姿が見える」「双方向でのやり取りが出来る」「リアルタイムでの会話ができる」「テクニカルな問題が少ない」ことが挙げられた。「カメラの前では話にくい。少人数のクラスの方が、自分の意見を言いやすい」という声もあった。

一方、UHI 創設以前の1996年からこの授業を担当している講師は、当初と比較してLANの改善により画像の品質が格段に良くなったことは評価しながらも、ビデオ・カンファレンスを介したクラスの難しさとして、「文字資料のみを見せるのには十分でも、地図と画像を見せるには不適當である。考古学では、広げた地図の回りに学生が集まって地図を読む演習が不可欠であるが、VCではこの作業ができない。Face-to-face のサイトでは問題ないが、VCサイトでは、モニターに地図を全部写すと極端に小さくなってしまふ。大写にすると鮮明さが欠けてくると部分的になってしまうという致命的な問題がある。」「テクニカル面での重大欠陥として、コントロール・ボタンの位置の問題がある。ボタンに触れずに資料を動かすのが難しい。これは、教える人の立場からでなく、コンピュータ・エキスパートが開発したせいだと思う。」ことを挙げた。「オンラインでは、景色 (landscape) やフィールド・ワークは教えられない。オンラインが全能という訳ではない。」「デジタル・テクノロジーは高額であるので、地図を読む演習の教材として、CD教材との組み合わせを考えている。学生は、銘々のコンピュータ上でCD教材を見ながら、VCでディスカッションが可能になる。」とも。

また、「経営学」でビデオ・カンファレンスを利用している他の教員からは、「ヒューマン・コンタクト

が可能である」「ディスカッションやチュートリアルに向いている」ことが利点として、「2サイト間なら問題がないが、3～4サイト間になると問題が多い」「時にクラッシュして、オーディオ・カンファレンスにくらべてメディアとして信頼性に乏しい」ことが問題点として挙げられた。

6.2 ITではカバーできないこと

因みに、「環境と遺産」のコース・リーダーである考古学者は、一定の日時を定めてフィールド・トリップを行うことが不可能な社会人学生のために「学生が個別に行えるフィールド・トリップ教材」を開発したことがある。それは、スコットランド高地を走る電車は空いていてかつ速度が遅いこと、1日の便数も限られていることを利用したものである。丁度観光バスガイドの要領で、予め左右の車窓から見るべき景色、自然環境、観察すべき特徴、下車する場所などに関する指示や説明、課題をテープに吹き込んでおき、学生に配布する。学生は、各自都合のつく時にこのテープを持参して電車に乗り、テープの声に従って学習する。これは一見安直だが、教材としてかなり有効なものであった。しかし、スコットランド鉄道が顧客サービス向上のために、電車の走行を大幅にスピードアップしたことで、このような方法は不可能になったという。現在の電車は余りにもスピードがあり、テープの指示に従って車窓から観察するには時間が足りない。コンピュータやビデオ・カンファレンスでは、「学生が自分で観察して、学習する」ことをカバーできない。「オンラインでは、景色(landscape)やフィールド・ワークは教えられない。オンラインが全能という訳ではない。」という先のコメントは、この経験を踏まえてのものである。

7. 事例3 - スタッフ・トレーニング

7.1 ウェブ教材の開発

すでに、1999年6月には「ビデオ・カンファレンス(VC)有効利用のための指針」(Guidelines for making the most efficient use of a videoconference(VC))を作成し、UHIホームページに掲載している。「VCに先立ち会合の主催者がチェックすべきこと」「参加者全員が努力すること」「会合の間参加者全員がすべきこと」「会合の収束に向けて」「終了後に参加者全員がすべきこと」からなる手引きの内容は、スコットランド高等教育助成委員会の主導により1996年-1999年に

実施したTALiSMAN (Teaching And Learning in Scottish Metropolitan Area Networks)プロジェクトが蓄積してきた成果を如実に反映したものとなっている。

しかし、関係者の話では「利用の指針だけを頼りにビデオ・カンファレンス・システムを使うのは困難」で「まず、利用経験のある仲間の授業を参観させてもらい、自分が必要なことを実体験を通して学ぶ」のが最善・最短の方法である。「利用の指針は、既に分かっていることの確認、覚書として利用するのが妥当」ととらえている。スタッフ・ディベロプメントの方法は、実際の授業を事例としてこれを参観した関係者によって改善の提案等をディスカッションする形を取っている。

7.2 ミニ・ワークショップ

2001年9月24日、ノース・ハイランド・カレッジでの「経営学」の授業終了後、ビデオ・カンファレンス・システム利用のスタッフ・ディベロプメントの時間があり、傍聴の機会を持った。

ビデオ・カンファレンスを介した授業においてコンピュータ(パワーポイント)を活用することに習熟している「経営学」担当教員のノウハウと、「ビデオ・カンファレンスを利用した効果的な授業展開」では学内で定評があり、自身もパワーポイントの活用の可能性を模索している「環境と遺産」の教員(考古学者)のノウハウを相互に紹介しながら、この授業を参観した他の教員も交えて改善を要する点等について意見交換をした。現在のビデオ・カンファレンス機器のキャパシティーでは、文字のみによるプレゼンテーションなら問題のないパワーポイントとの接続も、映像を提示することに意味のある考古学の授業では無理がありそうなこと。「経営学」の授業でスクリーンに提示されるのが単調に並んだ文字ばかりである点、かつ教室の明るさと画面の見やすさへの配慮が必要なこと、などが話題になった。

8. 事例4 コース・チームメンバーの打合せ

UHIのように、複数のカレッジで同じコースを提供する際には、カレッジ間の共通理解が不可欠である。

2001年9月19日の夕方、パース・カレッジがコース・リーダーになっている「児童・青少年学」のコース・チームメンバーの第1回打合せがあった。

8.1 ビデオ・カンファレンスを介した打合せ

打合せはビデオ・カンファレンスを介したもので、議長はコース・リーダーが勤め、各コース提供カレッジのサブ・リーダーは各自のカレッジのビデオ・カンファレンス・ルームから参加した。

各自が、自分のカレッジでコースを履修している学生数、フルタイムとパートタイムの別、コースの運営に関して現時点で抱えている問題点などを、順に報告し、基本的なことはコース・リーダーが答え、必要に応じて他のメンバーからのアドバイス、合意などを経て進んだ。

8.2 コースをめぐる課題

「児童・青少年学」は全面オンラインで提供されているコースである。カレッジによっては非常に立ち上がりが遅いことは、既述のとおりである。

この打合せで、コースチーム・メンバーから出された問題点は、どの程度学生と face-to-face のコンタクトをするのが妥当か 学生とのコンタクトに週何時間くらいを割けばいいのか 学生へのコンタクトは1回どのくらいの時間が適当か 毎週どのくらいのモジュールをこなすのがいいのか 指定の文献が本屋で手に入らないという学生からのクレームへの対処 コースへのアクセスのトラブル

学生から受けた「週に何時間学習するべきか？」の質問への対処 学生のITスキル ネットワークが遅いというクレームへの対処 パスワードに関する問題 学習のフィードバック カレッジのサービスに関する問題、などである。これらの問題について、「電話でのコンタクトが上手くいっていれば face-to-face のコンタクトは必ずしも必要でない。」
「8 9人の学生に対して、6 7時間を割く必要はあるのではないか。」火曜日は、フルタイムの学生のために2時間空けている。」などが話題になった。

次の開催日を10月24日と決めて散会した。

9. 事例5 - 修士課程の学生オリエンテーション

9.1 コース履修者の特徴など

UHIの修士課程の1つに、専門職能開発 (Professional Development) がある。リード・カレッジはルイス・キャッスルカレッジである。コースは、「専門職業教育や高等教育の教員」「成人教育やコミュニティ教育に従事しているチューター」「職業訓練に従事する

人」「学生や訓練生に対してテクニカル及び学習上のサポートをすることを専門にする人」「教育・訓練プログラムを運営する人」を対象に開発した。コース開発には、他カレッジからの協力を得て2年を費やした。現在学生数は30名で、殆どがUHIの教員である。

コース開発の動機は、大学院に行っていない教員が多い職業専門カレッジの教員に大学院修了の資格を得る機会を提供すること、あるいは、例えば工学に関しては資格があっても教育に関しては資格に欠ける人に資格取得機会を提供することである。

このコースは、現職での経験が授業の一部になっているので、学生は有職であることが条件になっている。コースはパートタイムのみでフルタイム・コースはない。

職業専門カレッジや高等教育機関では、「教育の資格 (Teaching Qualification)」を問われないが、UHIが「大学」の地位を獲得するには、教員が「教育の資格」を持つことが求められるので、UHIとしては重要である。

このコースは、他のコースと同様、プログラムはウェブ、ビデオ・カンファレンス、オーディオ・カンファレンス等を利用し、学生とのコンタクトはe-mailである。教員と学生との個別のコンタクトで学習を進めることを重視している。年間のチュートリアルは7~8回を予定している。

2001年9月28日、インバネス・カレッジで履修している学生を対象とする「コース・リーダーとの顔合わせ」があった。コース・リーダーはルイス・キャッスル島から出向いた。

9.2 オリエンテーションの内容と課題

参加した学生は4名で、全員が女性。年齢は40 55歳である。「顔合わせ」の会は3時間半に及んだ。

まず、用語の頭字を取って「LIGO」と呼んでいる Learning (学習), the Individual (個人), the Group (グループ), the Organization (組織) に関する勉学のトピックを学生に紹介した。次に今年度の教授内容である5つのテーマ、「理解 (Understanding)」「学習 (Learning)」「アセスメント (Assessment)」「組織的な学習 (Organizational Learning)」「評価 (Evaluation)」について話し合った。課題レポートの草稿の提出期限、観察の日の決定、ビデオ・カンファレンスの日の決定、期末レポートの提出日の合意をした。

このとき参加した学生は、当然カレッジの教員等の本務を持っている。学生が抱える問題の主なもの

は、学習時間を見つけ出すことと、いかに家庭、仕事、勉学の調和を図るかである。インターネット、e-mailへのアクセスのようなテクニカルな問題も出された。

10. ハイランド&アイランド大学の意義と課題

「沿革、目的、規模、熱意等を異にする学校で形成する大学連合体の運営方法」「当事者の意志とは無関係に必須とせざるを得ない条件下でのIT活用のためのFDの課題」「異なる学校間の教員、学生のレベルを一定水準に保つための方策」を問題意識として行った「ハイランド&アイランド大学」の事例研究は、歴史と関心事が異なる大学がITを活用してコンソーシアムを形成する際に起こり得る事柄について、有益な情報を与えてくれた。今回の訪問調査で把握できた課題を、ハイランド&アイランド大学の意義、及び「テクノロジーで学ぶ」ことをめぐる問題に分けて整理してみたい。

10.1 ハイランド&アイランド大学の意義に関して 大学への架け橋

既に述べたように、UHIは「ハイランド地方に大学を」という希求によって創設された。それが、当事者達にとっていかに快挙であったかは、「グラスゴーからランカスター大学のある所まで120-130マイルあるが、その間の地域に、1,2の大学分校はあっても独立した大学は1校もない。イギリスは、東海岸に比べて西海岸側には極端に大学が少ない。以前から、湖水地方に“University of Lake District”のようなカレッジ・コンソーシアムを創るという計画は地元にあったが、結局実現できなかった。」という教育関係者の話しからも伺い知ることが出来る。

では、UHIの創設で、若者はグラスゴーやエディンバラの大学に進学するのを控えるようになったか？いまのところ答えは「否」である。以前から、イングランドに比べてスコットランドの方が、大学進学率も高く相対的に教育のレベルも高い。グラスゴーやエディンバラ、あるいは、マンチェスターやロンドンなどの都会で学び、就職することを志望する若者は、相変わらずハイランド地方を後にする。それでは、誰が学生になるのか？それは、家庭や職業生活の事情から、どうしても土地を離れられない人、つまり主婦であったり、既に仕事を持っている人である。

この「土地を離れられない人」の特徴は、往々にし

て、従来の大学に進学するには要件を満たしていない場合が多い。つまり、スコットランドの大学入学資格は、4~5科目の“Highers”を1年間で取得すること、つまり“B”grade以上のものを4~5科目、うち3~4科目は“A”gradeであることが要件となる。これは、3科目の“A”gradeを2年間に取得することを要件とするイングランドよりも厳しい。スコットランドの教育システムの下では、中等学校時代に学業成績が振るわなかった人は、後に大学教育に参入するのは困難である。

UHIは、オープン・アクセスもあるFEカレッジのコースから入り、大学のコースへと進むことが可能なので、“Highers”が阻害要因となった人に道を拓くことが可能になった。

「ディアリング報告」ないしは「ガリック報告」で言及されている「学習社会における高等教育」に照らせれば、本稿1.4で述べた「学校間のギャップをつなぐ架け橋」として、UHIがスコットランドの教育制度に風穴を開け、「生涯学習社会」を具現化したという点で、その意義は非常に大きいと言える。

これは、1999年にグラスゴーから電車で2時間半の地に開設したグラスゴー大学クライトン・キャンパス(University of Glasgow Crichton Campus)の例と比較すると一層はつきりとする。このクライトン・キャンパスでは「環境学」「健康社会学」など非伝統的な学際領域のコースをパートタイムの社会人学生を念頭において提供している。共通必修科目である「現代社会」「科学・歴史・文化」「文献とコミュニケーション」「議論・修辞学・理論」の4科目は「グラスゴー・メイン・キャンパスと同じ講義をする」ために、ビデオ・カンファレンス・システムをフルに活用している。社会人のためのアクセス・コースもある。しかし、入学要件と進路はあくまでも従来のスコットランドの大学のそれに準じたものであり、UHIのようなフレキシビリティはない。

「地域のニーズ」重視のカリキュラム

UHIのカリキュラムは、雇用者側と協議しながら開発し、地域のニーズに適應するように編成している。地域の主要産業または主要ビジネスである漁業、土地管理、林業、海洋環境、観光などに焦点を当てた科目を整備し、ハイランド地域が直面している重要課題である過疎化現象、持続可能な開発、環境管理に対応できるように配慮している。そして、地域の産業界の大部分を占める中小企業で即戦力となる多角的

職能を持つ人材の育成を目的としている。

これは、「なぜOUでなくUHIなのか？」の答えにも通じる。

イギリスではオープン・ユニバーシティ(OU)が広く遠隔学習の機会を提供している。スコットランドにもOUの地域センター、The Open University in Scotland 11がエディンバラにあり、管轄地域内に36の学習センターがある。一瞥しただけでも、Inverness、Perth、Stornoway(Lewis Castle Collegeの所在地)、Thurso(North Highland Collegeの所在地)等が目に入ってくる。「なぜ、OU以外にUHIが必要だったのか?」「OUが学位授与するなら同じではないか?」この疑問に対する関係者の答えは、以下に集約される。

(1) OUに入学することは理論的には可能である。しかし、OUの授業科目が相対的に本格的な学問志向の色彩が強く、ハイランド地方に住む人の「専門開発」「職能開発」には直接結びつくコースが少ない。

(2) OUの教材は優れているがそれだけに割高である。

(3) OUの夏期合宿スクーリングや週末スクーリングは、地理的に遠すぎて時間的・費用的に参加するのが難しい、等である。

UHIが地場産業に密着した職業専門カレッジの連合体だからこそ、学習者のニーズを最大限に尊重したカリキュラム編成、時間的・空間的・経済的障害要因解決への対策と努力が可能となる。

ハイランド&アイランド大学がもたらしたもの

ハイランド&アイランド大学を構成しているカレッジの利害関係及び関心度は千差万別である。概して言えば、都市部から離れた土地にある小規模のカレッジほどハイランド&アイランド大学の創設を歓迎しており、またその発展のために積極的に動いている。(例:ルイス・キャッスル・カレッジ、ノース・ハイランド・カレッジ)学生の態度にも同様の特徴が見られる。

都市部の大規模なカレッジではハイランド&アイランド大学創設前に、既にスターリング大学やアバディーン大学等との協定でこれらの大学から学位を授与されるシステムを持っていた(例:Inverness College)。今後は、同じコースを履修しても学生は当面はオープン・ユニバーシティの、将来的にはハイランド&アイランド大学の学位を授与される。このようなカレッジにとっては、学位を授与する大学の知名度とステータスという点でロスがある。

しかし、それでもなお、ハイランド&アイランド大学の関係者は、「ハイランド&アイランド大学が創設されたことのメリット」として以下を評価している。

(1) 教員にも学生にも自負心を持たせる刺激となり、職業専門カレッジ(FE: Further Education College)における教授・学習のレベルを高め、開発する上での契機になった

(2) スコットランド高等教育助成委員会から直接補助金を受けるための媒体が出来た。従前は知名度の高い大学との協定校であっても「協定校」の資格では、公的補助金は親大学を介して間接的にしか得られなかった。いまは、UHI本部が高等教育助成委員会からの補助金授受の窓口となり、各カレッジに配分できるようになった。

(3) 交通手段の非常に劣悪な僻地に住む人々、あるいは、居住地を離れて学習することが不可能な事情のある人にとってはこれが唯一の参加可能な大学である。例えば、スコットランド西部に位置する島、ルイス・キャッスル島は、インバネスから飛行機で25分のところにあるが、航空運賃は往復160ポンドでディスカウント・チケットはない。グラスゴーからは350ポンド以上かかる。インバネスから電車、バス、フェリーを乗り継いで行くと交通だけで1日を費やす。「UHIがなければ学べなかった人には、福音になった。」という点は、関係者の評価するところである。

将来へ向けての課題

上記 までは、UHIのプラスの影響を認識している声である。しかし、全ての関係者にとって「いいことづくめ」でないことは、他の例と同様である。筆者に印象深かったのは、インバネスにあるUHI本部の学習・情報サービス部門の長が語ったこと、「UHI本部は、高等教育としての“品質”(Quality)の面で大きな責任を負っている」「今までにない大学の形態なので、“品質”の維持は真剣(serious)に取り組むべき問題である。」「今は、創設期間なのでスコットランド高等教育助成委員会をはじめ様々なところから支援を得られるが、いずれ初期投資の期間が終了すれば自力で賄わなければならない。そのとき、学生数を確保できて本当に持ちこたえられるか決して楽観は出来ない。特別な補助金が切れた時から、本当の勝負が始まる。我々は、今からそのときのことを覚悟している。」「は、管理・運営的な立場から見えるUHIの課題と言える。

さらに、将来 UHI が「大学の地位」を得る上で有利となる「教育の資格」を持つ教員を増やすこと、及び学位を持つ教員を増やすことという要請は、必ずしも現在の「良い教育」「良い教員」の確保には直結しないというジレンマがある。UHIの教員は、同時に職業専門カレッジの教員でもある。実務的な能力の賦与が尊重されるカレッジの学生を対象とする教授・学習活動において非常に優れている教員も、大学院コースの履修ないしは博士論文執筆など、研究活動の部分を重視されるようになった。研究活動のための時間も必要である。「優れた教員がしぼんでいく」ことを憂慮する声は、教員自身からも、9で紹介した「専門職能開発修士 (MA in Professional Development) のコース・リーダーの教員からもあがっていた。これが、内部関係者の取り越し苦労でないことは、UHIの教員をしている教え子に、現在大学院コースで指導をしているというグラスゴー大学の教員からの同様のコメント「彼女は十分に良い先生なのに、何故いまさら仕事を食い込むような時間を使わせるのだろうか？」からもうかがえる。「大学教員は、結局は“教育”ではなく“研究”の業績で審査される」という現実には、「新しい構想の大学」でも避けることは出来ない。これを変えるのは、「品質の維持」とのバランスの問題とも関連する微妙な、難しい課題である。

もうひとつ、「将来のUHI」のありようを決定すると思われるのが、「ハイランド地域、とくに都市部から遠隔の地域に若者を呼び戻せるか」である。UHIは「地域のニーズを重視したカリキュラム」を提供するという特徴をもっている。しかし、現在のところ、そのニーズの射程は、漁業、土地管理、林業、海洋環境、観光など、従前からの産業ないしはビジネスの範囲に留まりがちである。若者を地元を引き付ける吸引力のある労働市場を提供できていないことがUHIの弱点であると指摘する関係者の声も少なくない。都会から離れたところに居住していても遂行できる高度のテクノロジー・スキルを要求される仕事や、いわゆるハイ・テク産業を創出できるかどうか、が一つのカギと捉えている。

10.2 「テクノロジーで学ぶ」効果と課題

テクノロジーに対する態度

ハイランド&アイランド大学では今後オンライン・コースの取り込みが増えていくこと、10年後にはすべてがオンライン化するかも知れないこと、を予想しないしは覚悟している教員は多い。

現段階では学生も教員も「テクノロジーで学ぶ (Learning with Technology)」ことに、大なり小なり、何らかの問題を感じていることは、インタビューを通して受け取れた。それは、一部はITリテラシーが起因し、一部はそのメディアの特性が持つ限界に起因するものである。

教員がテクノロジーを媒体とした教授・学習活動に対して抱く最大の不信ないし不安感はface-to-faceのチュートリアルを持つ教育効果に対する絶対的な信頼感が起因している。更には、伝統的な大学では日常的な、授業時間以外の場面で繰り広げられる教員や仲間との交流による学習機会がUHIでは欠落しがちなことに危機感をもっている。「教育は、教材によってのみなされるのではない。仲間との雑談、スポーツ、食事会などから得るものの方が多い。」というコメントは、テクノロジーの恩恵をより受けていると思われる遠隔地に所在するカレッジの教官からより多くあがった。

学生に比べて教員の方がITを活用した教授・学習活動になじみにくい。「メディアの選択には、それが目的に適合しているか否かが重要」というのは教員へのインタビューの際に何回も出てきたコメントである。適合性への確信がないままに、必然的にテクノロジーに頼らざるを得ないことも「テクノロジーに対する不信感」の一部を成しているとも言える。

また、自らの学生時代には経験していないことへの抵抗感や、テクノロジーの活用という新しいテーマは本来の専門分野の研究時間を圧迫するという危惧もある。これらには、我が国の大学教員の経験と共通するものがある。

学生の方が、「将来的にはこれが一般的になる。」「就職機会には有利」という期待をもっているのも、新しいメディアに慣れようとする動機は強い。教員も「学生はニュー・テクノロジーを学べることを期待している」ことを認識している。

オンライン・コースの開発・運営システム

前述の、「テクノロジーの活用というテーマは本来の専門分野の研究時間を圧迫する」可能性は、オンライン・コースの開発においても当てはまる。コンテンツ開発からオンライン化までを同じ教員グループに期待するのは、教育の内容及び質の維持の面で無理がある。

オンライン・コースを本格化するには、コースのコンテンツの開発に専念する教員グループと、コンテ

ンツをオンライン化するのに専念するテクニシャン・グループの分業が必要である。そして、その際には、学生が個人使用するどのような仕様のコンピュータでも、無理なく対応できるようなデザインが不可欠である。UHIのオンライン・コースには、コンピュータの仕様の指定はない。オープン・ユニバーシティのオンライン・コースである「遠隔教育学」修士コース、ロンドン大学の「疫学：原理と実践」修士コース、アルスター大学(北アイルランド)の「バイオメディカル・サイエンス」修士コース等ではいずれも、学生が使用するべき機種と仕様を明確に指定しているのは、対象的である。

このことは、「どこまでが学校がフォローすべき、ないしは、フォローできるコンピュータ・トラブルか？」の問題にもつながる。関係者の声として、「導入したソフトウェアに関する問題は、機関内の要員が対応可能でも個人のコンピュータに固有のトラブルには対応しにくい」という。具体的な例では、WebCTに関わる問題は学生アドバイザーが対応できても、学生のコンピュータ特有の問題には対応が困難である。幅広く門戸を開放するためには、学生には機種と仕様の指定はないほうが望ましいのは自明である。それだけに、学生にとっては唯一の学習手段であるコンピュータにトラブルが生じた場合、組織としてフォローしてくれるシステムが不可欠となる。

より快適に「ITと学ぶ」ために

オンラインのパートタイム・コースは有職成人学生には学習しやすい。しかし、フルタイム学生に比較してパートタイムの学生が持つ制度上の不利益は、コンピュータのような比較的高額な機器を利用するオンライン・コースの場合、無視できないものがある。パートタイム・コースを前提にしているコースには、学校はコンピュータ貸与用の補助金を、行政から受けることが出来ない。コンピュータの利用が必須である授業科目を履修する学部生には、大学がコンピュータを貸与することも出来るOUのケースと比較すれば、その違いは大きい。

10年後には、UHIが提供するすべてのコースがオンライン化することを予想している教員が多いことは、すでに述べた。コンピュータに依存しすぎる教育は危険だとしながらも、オンライン化により世界中からアクセスが可能になるので、授業料収入を見込めるということで、これを歓迎する声もある。

全コースオンライン化は、現実的に可能か？現在

オンラインで提供されている学部コース BA in Child and Youth Studiesのみでもコンピュータに関連して生じる問題がある。「学生に高度のコンピュータ・スキルを期待することは出来ない」という現実もある。機種や仕様の指定をすることが機会均等を損なうかもしれないUHIにおいて、オンライン・コースが増えてきたときには、いま以上に、誰でも、高性能のマシーンでなくとも快適に利用できる、User Friendlyなコースの設計が課題になる。

同時に、カレッジ間の機器整備の平準化も重要な課題である。「高等教育機関」としてのスタート時である2001年において既に、学生の自学自習のための施設である学習リソースセンターのコンピュータの整備状況には、カレッジ間に非常なバラツキが見られる。学生個人所有のものよりも、学習リソースセンターの機器の方が高性能な状態の所と、はるかに劣る状態の所の差異は大きい。UHIが経年するに従い、バラツキが拡大する可能性がある。この格差の縮小に留意することも重要である。

オンラインを介してのコースには、コンピュータのバージョンの違いによるミスマッチ、キャパシティやメモリーの不足等の問題よりも、もっと深刻な問題がありうることを、今回の調査は教えてくれた。それは、コンピュータ・ウィルスによるダメージの問題である。2001年9月19日にスコットランド高地を襲った大々的なコンピュータ・ウィルスのアタックは、20日、21日の段階でもまだオンライン・コースを再開できない状態であり、被害はUHI関係者の予想を越えたものであった。これは、将来のオンライン・コースの最大、最強の敵は、コンピュータ・ウィルスかもしれないことを物語っている。

最後に、ビデオ・カンファレンスに関して。遠隔教育におけるビデオ・カンファレンスの利用には消極的意見の教員も多い。理由として「学生は教員と直接会い触れ合うヒューマン・コンタクトを望んでいる」「ビデオ・カンファレンスの設備は金がかかる」「テレビを見慣れている学生にはビデオ・カンファレンスの授業はインパクトに欠ける」「学生にとってストレスが高い」「教授・学習活動を奨励(encourage)できるメディアではない」などがある。相対的にウェブ、e-mailの利用の方が一般的になっているUHIではあるが、ディスカッションやチュートリアルにはビデオ・カンファレンスが効果的であるという認識は一致している。これは、テレビ会議システムの持つ「同

時双方向性」で「参加者の顔が見える」ことがポイントとなっている。今回のUHI調査と平行して行ったグラスゴー大学の調査では、社会人学生のパートタイム・コースを主流とするクライトン・キャンパス(Crichton Campus)の開設を機に、ビデオ・カンファレンスの活用が見直されている。「オンライン化はここ10年徐々に進んできたが、ビデオ・カンファレンスは、この3年間に急速にやってきた。」とは同大学の教授・学習サービス部門の教員の語るところである。「グラスゴー大学メイン・キャンパスの学生と同じ学習経験が出来る」ようにするために、それまでは医学部を除いては余り活用されることのなかったビデオ・カンファレンスの活用に踏み切ったという。このメディアが持つプラス面に着目してのことである。

UHIの教員らがデメリットとして挙げていることは、わが国におけるSCS(Space Collaboration System:衛星通信大学間ネットワーク)の利用推進の阻害要因として言われることと酷似している。しかし、これらは教員のファカルティ・ディベロプメントによりかなりの部分改善される筈である。問題は、スコットランド高等教育助成委員会の担当者が指摘する「われわれは、TALISMANパイロットプロジェクトの成果を踏まえ、利用の手引き、事例集のみならず、ハンディなパンフレットも作成して啓発している。しかし、このような資料に関心をもち、ワークショップに参加する教員は、もともと関心の高い人である場合が多い。本当は、関心の無い人にこそ参加して欲しいのだが、大学の教員に対しては行政は強制はできない」ことであり、これも、わが国のケースにそのまま当てはまることである。

文献

Towards a Learning Strategy for the University of Highlands and Islands, Report of the Learning Environments & Technology Working Group, 1999

UHI Millennium Institute Prospectus 2002, UHI

Millennium Institute, 2001

Strategic Plan 2000-2004, The University of the Highlands and Islands, 2000

The Open University Undergraduate Courses 2000/2001

瀬田智恵子, “イギリスにおけるバーチャル・ユニバーシティ”, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))高等教育における高度情報通信技術の活用報告書, pp157 - 171, 2001

瀬田智恵子, “スコットランドにおけるテレビ会議システム活用の取り組み”, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))通信制大学院のメディア経営戦略に関する国際比較研究報告書, pp13 - 18, 2001

瀬田智恵子, “オープン・ユニバーシティにおける大学院プログラム”, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))通信制大学院のメディア経営戦略に関する国際比較研究報告書, pp24 - 29, 2001

瀬田智恵子, “ロンドン大学における遠隔大学院プログラム”, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))通信制大学院のメディア経営戦略に関する国際比較研究報告書, pp30-38, 2001

瀬田智恵子, “アルスター大学バイオメディカル・サイエンス修士コース”, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))通信制大学院のメディア経営戦略に関する国際比較研究報告書, pp44-48, 2001

瀬田智恵子, “Learning with IT ハイランド&アイランド大学の事例”, 電子情報通信学会技術報告, ET2001/64(2001.11), pp63 - 70, 2001.11

<http://www.uhi.ac.uk>

<http://www.open.ac.uk>

<http://www.gla.ac.uk>

<http://www.cc.gla.ac.uk>

<http://www.lon.ac.uk/external/>

<http://www.ulst.ac.uk>

<http://www.shefc.ac.uk>

(本稿は、平成13年度日本学術振興会特定国派遣研究者事業(イギリスB)の研究成果に基づくものである。)